



児童教本作家としてのマーセットとその相互影響 ——「会話教本」の模倣と類似——

吉 野 成 美

要旨 本稿では、対話教本作家としてのジェイン・マーセットがその会話教本シリーズをてがけるにあたって影響を受けたと思われる、先達の教本作家マライア・エッジワースの教育論や、エイキンとバーボールドの『家庭の夕べ』を検証し、マーセットの教本との関連性を論じている。そして、19世紀の英国におけるマーセットの教育者としての相対的立場を明らかにしたうえで、彼女が確立した教本スタイルが後にどのように後続の科学教本作家に模倣されたかを考察する。

キーワード ジェイン・マーセット, マライア・エッジワース, 『家庭の夕べ』, 児童教本
原稿受理日 2011年1月13日

Abstract This paper mainly examines the process by which Jane Marcet established in her textbooks' popular style of *Conversations*, which seems to be influenced by the works of her predecessors, such as Edgeworth, Aikin, and Barbauld. By placing her among those educational authors, this paper will show how Marcet's *Conversations* became a dominant trend for science textbooks' styles during the next generation of the nineteenth century, thus allowing her followers to mimic her form.

Key words Jane Marcet, Maria Edgeworth, *Evenings at Home*, textbooks for children

本研究は科研費（「19世紀英国におけるジェイン・マーセットの経済学大衆化への貢献とその意義」, 研究代表者 高木成美, 課題番号20730141）の助成を受けたものである。

19世紀前半、『化学対話』(*Conversations on Chemistry*, 1806)⁽¹⁾をはじめとし、以降30冊近くに及ぶ教本類を執筆し、教本作家として一躍有名になったジェイン・マーセット(1769-1858)。その明快で系統だった教本内容は、各学術分野において研究対象として取り上げられる一方で、彼女の築いた「親しみやすい」対話形式の教本スタイルもまた、19世紀における英国の大衆および児童教育史の流れの中で、大きな役割を果たしたことも否めない。大衆教育発展の歴史的潮流において、彼女の教本類はどのように位置づけられるのだろうか。本稿では、マーセットの処女作『化学対話』の発表より前に出版された子供向け教本や教育論のうち、マーセットが影響を受けたことが顕著であるマライア・エッジワース(1768-1849)の著作を数編と、そのエッジワース自身が自著で言及している、18世紀末にイギリスの児童教育に影響を与えたジョン・エイキンとアンナ・バーボールドの教本『家庭の夕べ』を取り上げながら、19世紀英国におけるマーセットの教育者としての相対的立場や彼女が確立した教本スタイル、そしてその後続への影響について論じている。

マーセットの後継者ととらえられるマルティノーが、マーセットの『経済学対話』(*Conversations on Political Economy*, 1816)を実姉から借りて読み、「これなら私はすでに実践している」と考え、自らの本の出版を決意したというのは、マーセットとマルティノー双方に関するこれまでの研究の中で繰り返し言及されてきた有名な逸話である⁽²⁾。マルティノーにマーセットという先達者がいたのであれば、マーセット自身にもまた、教本を出版するにあたって、参照し、拠りどころとした先達者や先行文献はなかったのだろうか。マーセットに関する唯一の伝記である『たぐい稀なる女性』(*An Uncommon Woman*, 1993)において、著者のポーキングホーンは、マーセットの最初の教本『化学対話』の出版に先立ち、彼女が化学者として当時英国王立学院の講師であったハンフリー・デイヴィスの講義を聴講していたことや、種痘で一躍有名になったジェンナーとの交友、そして、医者として化学者として研鑽を積んでいた夫アレキサンダーの論文を査読していたエピソードを挙げている⁽³⁾。また、『経済学対話』執筆の際には、マルサスやリカードゥからの助言をかなり受けていた史実は、前述の伝記以外にも広く一般的に言及がなされているところである。

(1) 本稿では、扱う題材の性質上、一次資料の書名を明記する際には初出の時点で翻訳名だけでなく英語による原作名と出版年をカッコ内に記している。出版年に際しては、他の一次資料との歴史的な時間の相対的前後関係を明らかにするという目的のために、なるべく初版の出版年を記すことにしている。ただし、『家庭の夕べ』に関しては、初版の出版年は1793-5年であるが、筆者の参照した版は1807年のものであったため、本文中では初版年を記した上で、末尾の参考資料においては実際に参照した版の出版年を記している。

(2) Martineau, 105-6.

(3) Polkinghorn (1993), 18.

このように、教本の専門的内容自体について、マーセットの傾倒した学者や文献の関連性はこれまで十分な指摘がなされてきてはいるものの、それはあくまでも学術的ジャンル内に限定されてきた。そして、だからこそ、たとえば経済学というジャンルの中で、マーセットの経済学大衆化に貢献したという役割は先達者がいないという意味において特別視され、パイオニア的存在として扱われ、評価されてきたのであった。しかしながら、彼女が『経済学対話』と他二冊における経済学教本において試みた大衆化への糸口は、その内容よりは対象読者の設定や語りの演出など、手法にあったと言ってよいであろう。というのも『経済学対話』の成功の前にはデビュー作としての『化学対話』が存在し、この二冊に関しては形式その他においてまったく同じとってよいつくりとなっているのである。

以上の点をふまえた上で、本論で特に問題にすべきなのは、マーセットのすべての著書が、学問ジャンルの如何に関わらず「教本」として一般大衆や児童を対象読者としている事実において、その教育観や教本のスタイルのあり方をめぐって、彼女自身が思想的、もしくは手法的に模倣の対象として意識した人物や作品はなかったのだろうか、という点である。そして、残念なことに、この問題に関してはこれまでのところ、マーセット研究において論じられてきたことはなかったのである。このことの原因の一部として、他の多くの作家が残しているような自叙伝や書簡集が公には存在しないマーセットに関して、彼女自身の読書歴や交友歴を直接的には知ることができないという事情が挙げられるだろう。我々は、マーセットが自身の教本で記した数名の存在する学者や著述家たちのうち、大衆教育に関心を示していた人物を絞り込み、そこからマーセットの教本スタイルの源を探ることでは、この問題に答えることはできないのではないだろうか。

そこで注目すべきなのが『経済学対話』の序章の部分において、これから経済学を学ぼうとしている生徒キャロラインの問いかけに対してなされる、マーセットの分身ともいえるB夫人の回答である。

キャロライン

先生はもちろん、子供に経済学を教えたりはなさらないでしょう？

B夫人

私が望むのは、子供たちが学ばないことがないくらいに、その母親たちが十分に知識を持っているということです。そして、もし、エッジワースが「サクランボの果樹園」の話の中で実践しているような経済学の講義を母親たちが行えるというので

あれば、この話の内容は子供の理解力を超えているとは母親たちは思わないだろうということです⁽⁴⁾。

B夫人によって、「子供の理解力を超えて」いない経済学の講義として評価されている「サクランボの果樹園」は、エッジワースによって発表された数多く存在する子供向け教訓話のうちの一つである。エッジワース自身は、その作品がマーセットによって『経済学対話』で紹介されることになる1816年にはすでに英国における小説家、著述家、そして教育論者としての確固たる地位を築いていた。マーセットと年齢的にはほんの1歳しか変わらないが、精力的な文筆活動を行う女性という立場において、エッジワースはマーセットにとって学問の専門領域を超えたところでの先達とも呼べる人物であったと推測できる。

エッジワースとマーセットはその生まれ育った環境や境遇に多くの共通点を見いだすことができる。ともに長女として裕福かつ教養のある家庭に生まれ、生みの母親を若くしてなくした。女性であるがゆえに家名を継承できないまでも、教育熱心で思想的にリベラルな父親のはからいによって、当時としては珍しく男兄弟たちと同じ教育を受けることができた。また、長女であったことから、早逝した母親にかわって弟や妹の教育にも力を注いだ点も同じである⁽⁵⁾。エッジワースは父親で教育論者のロヴェルの助手をつとめながら彼と共著で1798年、『実践的教育』(*Practical Education*)という教育論を発表し、その成功によって、文筆家として名前が知られるようになった。マーセットもまた、母親の早逝をうけ、銀行家である父親の開く社交パーティーで知識人をもてなす女主人としての役割を果たすことで、家の中にいながら、当時の最先端の学術情報を欲しいままにできるという、恵まれた環境に身を置いていたのであった。エッジワース家とは異なり、学術には無縁であった父ではあるが、その父の紹介で知り合い、後に結婚することになる医師であり化学者のアレキサンダーが良き相談相手となって、マーセットもまた、エッジワースの作家デビューからおよそ10年後、教本作家となった。出版当初は著者の名前を明かさず、版を重ねた後によりやく公表するやり方も、二人に共通している点である。マルティノーがマーセットの妹的存在であるとするならば、エッジワースはマーセットにとって「姉」のような存在であったといえるかもしれない。ただし、自活のために売れる本を書く必要に迫られていたマルティノーに比べ、エッジワースとマーセットの家庭はともに生活に困らない資産家であり、知的で華やかな社交活動に勤しめる恵まれた環境に身を置いていたことも

(4) Marcet (1816), 12.

(5) ただし、エッジワースの場合、父親のロヴェルは最初の妻（マライアの実母）を亡くした後、3度再婚し、24人の子供に恵まれた。

あって、さらに近い関係であった。エッジワースの書簡集には、彼女がたびたびマーセット家に招かれたことや、マーセット自身がエッジワースの邸宅を訪れたことなどが記されている。

実際、『経済学対話』の冒頭におけるマーセットのエッジワースへの言及は、彼女が教本における学問内容に関してその参照をあらかじめことわっている他の（男性）学識者に対する描写に比べて敬意の差こそないものの、より親密でくだけた調子であることがうかがえる。たとえば、マーセットは作品の序章でアダム・スミスを筆頭にセイ、リカードゥ、マルサス、シスモンディらに対して著者自身の口から謝辞を述べているのに対し、エッジワースへの言及は経済学という大変な勉学を始めることに躊躇するキャロラインを安心させ、励ますために、B夫人を通して、彼女の教本なら理解できるように書いてあることを説明しているのである。しかもこのとき、キャロラインはマーセット自身が謝辞で言及した「アダム・スミス博士」の理論を自分が理解できないかもしれないことをB夫人に打ち明けた後であった。「アダム・スミス」という名前は敷居が高すぎるように思えるかもしれないが、表現の方法さえ工夫をすれば、理論を理解できるようになるということこそ、マーセットが経済学の教本を書き始めるのにあたり、自身の使命としてとらえていたことではなかったか。この箇所は、マーセット自身、エッジワースの手法から大いに学んでいたのではないかと思わせる言及である。

エッジワースとマーセットの直接の出会いの始まりは、エッジワースの妹が酸を過剰に体内に取りこみ、危険な状態になった際に、マーセットの『化学対話』に書かれていた、酸の解毒方法を紹介した箇所を、その場にいた誰かが思い出して実践し、妹の命が救われたときにまでさかのぼる。この逸話を自身のエッセイで発表している E. V. アームストロングによれば、実妹が回復したことについて、当時まだ匿名での発表であった『化学対話』の著者に謝意を伝えるためにエッジワースが出版社に問い合わせたということであるから、二人が知己の関係になったのは、早くとも『化学対話』出版の後ということになる⁽⁶⁾。そして、その後の二人の接点を考えるうえで目安となるもう一つのエピソードが、ポーキングホーンの指摘にある、『経済学対話』の出版にあたり、エッジワースの父ロヴェルが、生徒役のキャロラインを男子学生に変えるべきだと助言をしたが、マーセットは譲らなかったという逸話である⁽⁷⁾。これら二つの逸話が両方とも正しいとするならば、エッジワースとマーセットの関係は『化学対話』の初版発表後、『経済学対話』の初版発行前

(6) Armstrong, 55-56.

(7) Pokinghorn (1995), 80.

まで（すなわち1806年から1816年の間）に築かれたと推測される⁽⁸⁾。またさらに別の言い方をするならば、『経済学対話』の冒頭でエッジワースの「サクランボの果樹園」に言及した時点で、マーセットはエッジワースも想定読者の一人として十分意識した上で、後続者の立場から彼女に敬意を払う一方、彼女の作品とは異なる自身のオリジナリティを発揮しようとする気概をもちあわせていたということになる。

「サクランボの果樹園」は、小学校の子供たちを主人公にした教訓話であるが、マーセットがエッジワースの数多くある作品の中で特にこの作品に言及しているのは、言うまでもなく、この話の最終部分で、小学生たちが従事する帽子用のわらを編む作業における「分業」体制の描写が存在するからである。物語の大筋は、協調性に著しく欠け、利己心ばかりが際立つ男子生徒オーウェンが、果樹園に生っているサクランボを買うためのお小遣い稼ぎにわらを一人で編もうとするものの、彼をのぞく子供たちで結成された集団による分業体制に、仕事の速度と質の両方で敗北し、初めて自身の身勝手さを思い知って仲間と調和していくことを学ぶという、きわめて道徳的な内容にまともっている。子供たちによる手際よい分業体制の仕事ぶりとはどういうものだったのか。以下にその箇所を引用してみよう。

一人が麦わらを取り出し、別の一人がちょうど良い長さに切りそろえた。また別の一人がそのわらを選び分け、束にしておいた。別の誰かが今度はその束を平らにし、また別の子が（この子は最年少の少女だったので、他に何もできなかったために）わらを編んでいる者たちのためにわらを用意して持っていた。編み終わったわらのギザギザになった端を切りそろえる者がいて、また別の者が熱いアイロンをかけた。また別の者が編まれたわらを縫い合わせた。全員が「オーウェン」のできる最高で最速の仕事をこなしていた。誰も一つの工程から別の工程へ移るのに時間を無駄にすることはなかったし、必要なものを探すこともなかった⁽⁹⁾。

(8) エッジワースの書簡集では、1809年6月に初めてマーセットに関する言及がみられる。エッジワースが暮っていた叔母のラクストン夫人に宛てた手紙の中で、「ホーランド氏がバーボールド夫妻とマーセット夫人について私たちに教えてくれた」と書いていて、さらに、「マーセット夫人は『化学対話』の著者」であり、「彼の説明によれば魅力的な方であるようだ」と、マーセットのことを紹介している。この文面から推測する限りでは、この時点ではまだエッジワースとマーセットは出会っていないようである（*The Life and Letters of Maria Edgeworth*, vol.1, 93）。この次にエッジワースの書簡にマーセットが登場するのは1820年の8月5日付のラクストン夫人に宛てた手紙の中で、エッジワースはジュネーブのモアリエ邸にてマーセット夫妻を含めた数名とともに食事を楽しんでいる（*Ibid.*, 171）。

(9) Edgeworth (1795), 256.

「サクランボの果樹園」については、エッジワースをマーセットとマルティノーの先達者としてとらえているヘンダーソンがその著書『文学としての経済学』（1995）において、マーセットが『経済学対話』内でエッジワースのこの作品に言及されている点にもふれつつ、この作品の詳細を分析している⁰⁰。その中で彼は、エッジワースがこの作品において問題にしているのは、人の「経済」的な営みというよりはむしろ「社会」的な関係であり、人が集まって協力することの必要性であったと指摘している。そして実際、ヘンダーソンの論を持ち出すまでもなく、本作品を読めば、この物語の主題が、人が分業体制で生産に従事することの経済的効率の有効性を礼賛したものでは決していないことは明らかで、果たしてこの物語が「経済」を主題として、もしくは副主題としてさえも扱っていたのかさえ実際のところ不透明である印象を受けることは否めない。というのも、前述の引用部分でオーウェンを除く子供たち全員が分業体制で効率良く麦わらを編んでいく過程が示された直後、エッジワースの語りは、それと対照的なオーウェンの様子を以下のように描写するのである。

その反対に、オーウェンは、必要なものを探すのに多くの時間がかかっていた。彼がわらを編む横で次のわらを持ってくれる人はいなかった。だから彼は仕方なく自分で次のわらを取りに行かなくてははいけなかったのだ。そして彼のわらは選り分けられた束になってはいなかった。風が吹いてわらは飛んでいった。そのわらを追い掛けまわすのに少なくとも半時間くらいはかかった。それだけではなかった。編んだわらの端のギザギザ部分を切ってくれる友達はいなかった。編んだわらを縫い合わせてくれる人もいなかった。オーウェンはわらを編むのは速かったが、縫うのはそうでもなかった。この手の仕事には慣れていなかったのだ。彼はマリアンヌがこの仕事を自分のためにしてくれたら良いのにと強く願った。針に糸を通すのに15分まるまる費やしたこともあった。その針穴は本当に小さかったのだ。その後、彼はまた別の15分間、もっと大きい針穴の針を探すことに費やした。だが、ついにそれは見つからなかった。誰

⁰⁰ Henderson, 21-41. 多くのマーセット研究家がマーセットを女性著述家の中では経済学大衆化に貢献した最初の人物であるという前提で論を進めているのに対し、ヘンダーソンの論のユニークなところは、経済学大衆化の歴史の流れの中で、マーセットの先達者としてエッジワースを位置づけている点であろう。そして、ヘンダーソンは、マーセットとマルティノーの二人のうち、エッジワースのストーリー・ライティングの影響を受けたのはマルティノーのほうであったと結論付けている。手掛けた教本のジャンルを経済学のみに限定した場合、確かにヘンダーソンの主張は理にかなっているといえる。だが、エッジワースとマーセットはともに理性的な学問としての「科学」の教育に関心を示し、前者はその方法を理論化し、後者はその方法論を応用して実際に教本を著した。エッジワースとマーセットの二人は、経済学の域を超えたところで強固につながっていたと考えられる。

も彼に貸してやろうとも言ってくれなかった¹¹⁾。

オーウェンの作業が遅々として進まないのは、すべての工程を一人でこなしているからであることはもちろんであるが、この箇所において、彼の「一人」である状態は、「一人分の労働力」という単なる数的「単独」を表す以上に、彼の社会的「孤独」を強調する役割を果たしている。そしてその「孤独」は、「彼のために～してくれる人はいなかった」という表現の繰り返してさらに深まっていく印象を読者に与えている。文脈的状况において、ここで欠けているのは、わらを効率よく編むための純粋な「労働力」ではなく、オーウェンに手を差し伸べてくれる誰かの「心がけ」なのだ。彼がグループ内のリーダー的存在であるマリアンヌに帽子の縫い合わせを引き受けてほしいと思う時、それはオーウェンが縫い物を苦手としているからという物理的な理由以上に、結束するグループからその代表者、すなわち象徴であるマリアンヌを引き寄せたいという精神的な気持ちの表れではないのだろうか。だからこそ、その直後で、オーウェンがより大きい針穴のついた針を探し求めている際に、「誰も彼に貸してやろうとも言わなかった」と続くと、それはなおさら非情なものとしてオーウェンにも、また、物語の外側にいる読者にもうつるのである（もちろん、ここでの「非情」はオーウェンの自業自得であることは疑いようもないのであるが）。明らかに、針の貸し借りはシステム化された分業体制とは無縁の事柄であり、この物語がただスミスの分業について説明することを目的として書かれたのであれば、まったく必要のない記述であったことは間違いないだろう。

こうしてみると、「サクランボの果樹園」が経済学の教科書としての有効性を読み込んでいるのはこの物語の作者エッジワースではなく、読者としてのマーセットのほうであるととらえるべきなのかもしれない。マーセットはエッジワースへの言及の直後、もう一つの例としてミダスが登場するギリシャ神話にも言及している。

B夫人

……子供たちにはミダス王の話を聞かせても良いかもしれないですね。触れるものすべてを黄金に変えてしまう王の話です。

キャロライン

あれが経済学のお話ですって？ 先生こそ、触れるものすべてをその学問に変えて

¹¹⁾ Edgeworth (1801), 256-7.

しまう技をお持ちだと私は思いますわ。

B夫人

それは技ではなくて、物事の本質です。ミダス王の物語は、黄金は、そのものが富を形成しているのではなく、この世における生産物のうち、どれだけ必要とされるかその度合いに応じて支払われるための手段であるという意味において価値があるのだということを教えてくれているのです¹²⁾。

この一節からわかることとして、マーセットは、経済学を学ぶためにうってつけの「物語」が存在するというよりはむしろ、解釈の方法によって、誰でも知っているようなありふれた物語に経済学を読み込むことが可能であると考えていたようである。そして、その具体的な解釈方法を教えることが、マーセットにとっての教本を執筆することの主要目的でもあった。だからこそ、『経済学対話』では、分業体制について、あるいは貨幣について、既存の物語や神話を引き合いに出して説明することはあっても、エッジワースが書いたような物語そのものが、教本内で、たとえばB夫人の語りを通して披露される、というようなことは起こらないのである¹³⁾。

マーセットがエッジワースから受けた影響は、「サクランボの果樹園」のような個々の教訓物語の内容よりはむしろ、エッジワースの教育論で主張される、効果的な教育手法や、教本の体裁や表現であったのではないだろうか。たとえば、マーセットの『化学対話』から数編を抜粋して2006年に刊行された『教室の化学講義—1806年』の序文の中で、編者であるヘイゼル・ロソッティは、マーセットが自身の本を出版する以前に科学の分野で影響を受けたかもしれない作家や教本を紹介するくだりで、次のように指摘している。

1782年の母の死後20年余りがたってからマーセットは『自然科学対話』(*Conversations on Natural Philosophy*)を書いていたが、そのとき彼女は、マライア・エッジワースが、女性の教育に賛成か反対かで議論する二人の男性の会話を書いていたことを知っていたかもしれない¹⁴⁾。

¹²⁾ Marcet (1816), 12-13.

¹³⁾ マーセット自身が物語の中に経済学のテーマを取り込む手法を用いるのは、『化学対話』や『経済学対話』を代表とする「対話教本シリーズ」が出た後、作風変化の兆しが見られた1830年以降に書かれた『経済学に対するジョン・ホブキンスの見解』(1833)の前半部分においてのみである。なお、この作品は本論において以後『ジョン・ホブキンス』と記す。

¹⁴⁾ Rossotti, xvii.

ロソッティがここで言及しているエッジワースの作品とは1795年に出版された『学問を志す女性のための書簡集』(*Letters for Literary Ladies*)である。この教育論の冒頭部分では、マライアの父ロヴェルと彼の友人であるトマス・デイが科学と哲学の分野における女性の教育に関して賛否を議論し、その後、今度はジュリアとキャロラインという二人の女性が書簡形式でこの議論の詳細を論じる形式となっている。「キャロライン」という登場人物の名前がその後のマーセットの対話教本におけるもっとも重要な人物の一人を想起させることから考えても、ここでのロソッティの指摘はまったく根拠がないとは言えないだろう¹⁵⁾。そして、このロソッティの推測が正しいとするならば、マーセットは、エッジワースと個人的に知り合うよりも前に、彼女の著書からすでに影響を受けていたということになる。また、さらに付け足して言うならば、『学問を志す女性のための書簡集』をマーセットが読んでいた可能性があるのであれば、この本の出版から3年後に発表されたエッジワースの『実践的教育』(父親のロヴェルとの共著)は、その内容の充実度や出版後の知名度から考えて、マーセットの目にとまらないとは考えにくい。

ここで、マーセットが自身の執筆活動を開始する前にエッジワースの代表作である『実践的教育』を読んでいたかどうかを考察するにあたって、もう一つの興味深い文献が存在している点にも注目しておきたい。それは、『科学対話』(*Scientific Dialogues*)という表題の教本で、マーセット自身が自著『化学対話』の初版序文において言及している。以下にその引用を抜粋するが、ここでは架空の第三者がこの著者(マーセット)の代筆をしている体裁をとっており、抜粋中にある「著者」とは『化学対話』の執筆者すなわちマーセット本人を指している。

『化学対話』は、その最初の部分から、読者のみなさんに自然科学の予備知識があることが前提となっていることがわかるだろう。また実際、そうであることは大変望ましい。著者のもともとの意図としては、この本を小冊子形式で始め、この本と同じような計画でその分野の科学における基本原理を説明するつもりであった。著者はそのアイデアを採用しないことにしたのだが、原稿自体は出来上がっていて、将来的には出版される可能性もあった。しかしながら、今となってはそれもなくなってしまった。というのも、最近になって、それと似た記述内容の初級者向けの本で『科学対話』

¹⁵⁾ ロソッティはまた、マーセットが幼い弟妹に勉学を教える必要性から、教育関係の本として例えば『家庭の夕べ』(*Evenings at Home*)などを読んでいただろうと指摘している(xvii)。この点に関しては本論の後半部分で考察する。

という表題の作品が著者に紹介されたのだった。これを精読してみれば、大変よくできた本であり、意図された目的にこたえるようにうまく計算されている内容であった⁴⁶。

このようにマーセットが『化学対話』序文において断り書きをしている『科学対話』とは、ジェレミア・ジョイス牧師によって1805年に初版が出版された科学に関する教本集であるが、その中の登場人物には、①父親と二人の子供たちのセットと、②個人教授と二人の男子児童という設定の二種類が巻によって存在し、いずれの場合も、科学に関する知識を会話の中で深めていくことを意図して書かれたものである。会話形式であることに加え、話し手の構成（二人の子供と一人の個人教授）にジェンダーの違いこそあれ、それ以外は、後にマーセットが出版することになる対話教本シリーズと酷似している点は重要である。マーセットが自著の序文で断りを入れていなければ、彼女の教本類は完全にジョイスの著した『科学対話』の類似本や模倣本としての扱いに甘んじなくてはならなかったかもしれない（実際マーセットが『自然科学対話』の下書きを書いたのは1802年頃で、ジョイス牧師の『科学対話』出版より3年前であった）。しかし、マーセットとジョイスが同時期に同じような対話形式を用いて教本を書いたことは単なる偶然ではないことが、ジョイスの教本内で言及されているエッジワース作品の引用に推し量ることができるだろう。ジョイスはその『科学対話』のタイトルページの下方に、当時としては出版されて数年しか経っていなかった、エッジワース父娘著の『実践的教育』からの一文を引用し、彼自身、エッジワースの主張する「対話形式」が引き出す教育的効果を確信していることを強調していたのである。

言葉の意味を説明する習慣とありふれた家庭内の手段であるという意味において、会話（conversations）は子供たちにとって、科学を習得するために心の準備をするのに確実に効果的な方法である。

これは『実践的教育』の第二巻、「力学」（Mechanicks）の章からの引用であるが、エッジワースはこの章において、力学をふくめ、自然科学や物理学の知識を子供たちにいかに効果的に教え込むか、という問題について考察し、この科目にとって厄介な専門用語は、

⁴⁶ Rossotti, xxiv-xxv.

教本を繰り返し読むよりは、より自然な「会話」の中で用いたほうが習得しやすいと主張している。自然科学に関する教本を執筆するにあたり、教本内で架空の家族による「会話」を通して科学の知識をひろめる方法を採用しようとしていたジョイスにとって、エッジワースのここでの主張は自らのやり方を正当化するためにぜひとも引用しておきたい箇所であったのが明らかである。

そして奇しくも、ジョイスが注目したエッジワースの「会話」(conversations)という言葉は自著のタイトルに掲げ——ジョイス自身の教本タイトルには「会話」ではなく「対話」(dialogues)という言葉が使われた——同じく自然科学に関する教本原稿を発表しようとしていたのは、実はマーセットのほうであったのだ。明白なのは、ジョイスの作品が発表されるよりも前に『自然科学対話』の原稿が出来上がっていたマーセットが、遅くともジョイスの作品を読んだ時点でその序文を通してエッジワースの『実践的教育』の存在を知ったか、もしくは既に知っていたということである。しかし、マーセットが後に自著の『化学対話』でジョイスの『科学対話』出版に先立って同じような教本を自身も手掛けていたことをわざわざ告白していることから、ジョイスの教本を通してエッジワースの『実践的教育』を知ることになったと考えるのはむしろ不自然であるということができる。当時、『実践的教育』がイギリスでも大変好評を博した教育論として名高かったこと。さらに、その数年前に出版された『学問を志す女性のための書簡集』をマーセットが読んでいた可能性が濃厚であること。そして、何より、ジョイスと同じくエッジワースが推奨していた対話形式を採用してマーセットも教本を書いたこと。これらの事実から、マーセットは自身が文筆家となる前に『実践的教育』を読み、かつ影響を受けていたと推測するのがもっとも自然であろうと考えられるのである。

エッジワースの『実践的教育』は、幼少期から思春期までの子供にどのような教育が必要であるか、一巻では、乳幼児に与える玩具の選別方法に始まり、言語習得、しつけ、良書の見分け方まで、続く二巻では、文法、文学、力学、化学、数学、経済など、具体的教科ジャンルごとの項目に分けた上で、個々の科目についてその教育の必要性について主張し、また実際にはどのような教育を施すべきなのか実践的方法を提示している。前述のジョイスの引用にあったように、科学の教育ジャンルにおける「会話」の有効性は、しかしながら、科学だけに限らず、『実践的教育』全体を通してあらゆるジャンルにおいて推奨されていることは、この著書の1巻の最後の章において、教育的視点から「書物」について論じた箇所を読めば歴然とするだろう。

対話や劇、そしてよく書けた語りは、子供たちはいつでも上手に読む。そしてこういったものは読みの技巧をみがく練習台にするべきなのである。ただし、もし子供たちが読むのに疲れたらすぐにやめなくてはならない。しかし注意深い先生であるならば、疲労の頂点の前に、やめさせるときというものを心得ているものである。聞いた話では、ある9歳の男の子は、特に師匠について朗読法を学んだというわけでもないのに、ちょっとした感傷的な文や『家庭の夕べ』にある自然体の対話を、まるでスターンの批評家がストップウォッチを押すのを忘れるほど「流暢に」読んだということである⁷⁷⁾。

この部分はまさしく、書物の内容よりも、その「語り」(narrative)のあり方が、新しい知識を得ようとしている若者にいかに影響を及ぼすかを主張している点であり、重要である。エッジワースは、何を教えるかという具体的な内容ではなく、どうやって教えるかという方法について論じているのであり、この点において、エッジワースの主張はそのままマーセットのジャンルを超えたすべての教本作成に生かされていると言えるのではないだろうか。

さて、エッジワースの『実践的教育』全般において、しばしば言及され、また上記の引用部分にも登場している教育書『家庭の夕べ』(Evenings at Home, 1792-95)に関して、ここではマーセットへの影響という観点から論じておくべきであろう。ユニタリアン思想家で医師のジョン・エイキンと著述家で詩人のアン・バーボールドという二人の姉弟によって著された『家庭の夕べ』は、18世紀の終わりから19世紀全般にわたる約1世紀の間を通して、自然科学、法学、文学、道徳といった、人間をとりまく自然と社会の仕組みについて10歳前後までの子供たちにわかりやすく説明することを目的として書かれ、実際に多くの子供たちに読み継がれたすぐれた教本として今日でも英国教育史の分野において定評のある書物である。ユニークなのはこの本の構成で、それはまるで千夜一夜物語のように、一話読みきりの物語、詩、対話問答集、そして論文文といったあらゆる形式の読み物が、第何日目の何話という形で配置されており、これらの話の掲載順序はジャンルごとに分けられることもなければ、系統だてて並べられることもなく、読者はどこから読み始めても

⁷⁷⁾ 『実践的教育』vol. 1. 295 を参照。ここでふれられている「スターン」とは、18世紀に活躍したイギリスの作家ロレンス・スターン (Laurence Sterne) のことであろうと推測される。ストップウォッチのエピソードはスターンの代表作である『トリストラム・シャンディ』の第2章5節で言及されているギャリック(人名)の独白があまりにたどたどしく、言葉につまるたびにストップウォッチで独白再開までの秒数をはかったという挿話にちなんだものではないかと思われる。

良いようになっている。そしてまた、この一見無秩序で行き当たりばったりの様相を呈している話の構成と設定に関しては、教本の導入部分においてきちんと説明がなされており、それ自体もまた話の一部となっているという、教本としてはかなり手の込んだ「物語」作品として仕上がっているのである。

『家庭の夕べ』は、もともと、とある村の大邸宅に居住する大家族、フェアボーン一家(Fairborne—「生まれ」の良いという意味をもつ)のもとを訪れる客たちが、この家の子供たちを楽しませるために、宿泊のお礼として書いた小話を紹介したものであるという体裁をとっている。すなわち、客たちの「いく人かは書くことに慣れていて、子供の年齢と理解度にあわせて童話や小話や対話を書くのだった」^⑧。こうして書きためられたものは大切に箱に納められ、夜、年齢の小さい子供が箱の中から一枚抜き出して家族が集まる居間へ持って行き、年齢の大きな子供がそれを読み上げ、家族で楽しむことになる。話が終わればまた別の紙を取り出して読み聞かせ、両親が十分であると思うところまで(別の言葉で言い換えるなら、就寝時間になるまでということであろう)それが繰り返される。フェアボーン一家が所有するこのお話の束(たば)は近所でも評判となり、一般公開することが求められ、それがそのまま本に収録されている、というのが、あくまでも創作の域ではあるが『家庭の夕べ』という書物の存在理由となっている。構成の無秩序性は、①複数の宿泊客がその場限りで書きつけたものを、②小さい子供たちが無選別に取り出して居間に運び、③寝る時間が来るまで読み続けるという過程を経て必然的にうまれたものであるということになっているが、もちろんこれは作者の作爲的なプロットの一部である。そこまでしてなぜこの無秩序性を正当化する必要があるのか、という点について、たとえばアイリーン・ファイフェは、『家庭の夕べ』の著者たちは子供たちの注意をひきつけるためには話がバラエティに富んでいることが必要であると固く信じていた。子供たちは面白と感じなければ効果的に学ぶことがないと彼らは思っていたのだ」と説明している^⑨。

興味深いのは、ファイフェによれば、バーボールドとエイキン姉弟のこの固い信念が、「後の模倣者たち、たとえばジェレミア・ジョイスの有名な『科学対話』が単独の形式、つまり通常は対話か会話の形式を用いて、一冊の本の中で同じ登場人物を一貫して起用することで持続性を保とうとした」のと対照的である点である^⑩。『科学対話』のジェレミア・ジョイスは前述したとおり、マーセットの『化学対話』に僅差で先駆けた科学の教本

⑧ Aikin and Barbauld, 2.

⑨ Fyfe, xxiv.

⑩ Ibid.

であるわけだが、ファイフェの記述から、彼もまた『家庭の夕べ』に影響を受けた教本執筆者の一人であったことがうかがえる。しかしながらジョイスは、文体に関しては『家庭の夕べ』でしばしば採用されている対話形式のみを模倣し、扱うテーマに関しては科学のみに始終することで教育書として一貫性を持たせることにしたのだった。そしてまた、ジョイスに続き、マーセットも、教本執筆に際しては同じ登場人物を繰り返し起用し、対話形式を貫いていることから、『家庭の夕べ』とは異なるスタイルの確立を目指していたことになる。

とはいえ、『家庭の夕べ』の対象読者は10歳頃までの児童であり、よって、扱う教育内容も初歩的なものがほとんどであったのに比べると、マーセットの対話教本シリーズでは、『化学対話』の序文で示されているように「読者のみなさんに自然科学の予備知識があることが前提となっており、さらに上級学年向けの読み物として企画された。そのため、対象読者の注意をひきつけるためにあえて様々なジャンルを混在させ、一見、無秩序とも思える読み物としての教本を作る必要は、マーセットにはなかったのかもしれない。しかしながら、この対象読者設定の裏には、期せずして先を越されてしまったジョイスの『科学対話』が設定した読者層と重ならないようにする必要があったという、やむを得ない事情をマーセット自身が抱えていたこともあった。その結果として、『化学対話』の出版は、マーセットにとって、B夫人、エミリー、そしてキャロラインという三人の女性たちによる一連の対話教本シリーズという²¹⁾、他の誰のものとも異なるマーセット独自のオリジナリティを有した作品群のひな形ともいえるべき礎となったのである。そして『経済学対話』が出版された際には、『家庭の夕べ』の作者の一人であるアン・バーボールドも自身がこれを読み始め、経済学が「女性の書く新しい題材」であると思っている旨をエッジワース宛ての書簡に書いていることから、マーセットは間違いなく19世紀英国における児童・青少年教育史の分野において、バーボールド、エッジワースとつながる女性の教育論者の系譜に属する人物として分類して良いと言えるだろう²²⁾。

『家庭の夕べ』の形式こそ模倣しない選択をしたマーセットではあるが、1830年以降、すなわち対話教本シリーズの発表が一段落して後、読者対象を青少年から児童にかえて発表された教本の数々においては、逆に『家庭の夕べ』やエッジワースの短編小話集のスタイルを意識したような作品が多くみられるようになる。たとえば、労働者階級に経済学を

²¹⁾ ジョイスの教本では登場人物には男性が混ざっていた。

²²⁾ Barbould, 178.

普及させる目的で書かれた『ジョン・ホプキンズ』では、ジョンとその家族という核となる登場人物は常連として存在するものの、作品全体は以前の対話教本シリーズのように一貫して教師と生徒の対話形式をとることはなく、登場人物による「会話」以外に、地の文として「語り」が配置されている箇所が少なくない。特に『家庭の夕べ』の枠組を想起させるものとしては『ジョン・ホプキンズ』の第3章「三人の巨人たち」があげられよう。ホプキンズ家に一晚の宿を求めてやってきた旅人が宿代のかわりに子供たちに小話を披露するという形で始まる動力源と生産性向上の寓話は、『家庭の夕べ』の導入部分で紹介されている、フェアボーン家を訪れる旅人が書いた物語を残された家族が読むという物語設定と酷似している²⁸。これは明らかにマーセットが『家庭の夕べ』を意識した上で書いたといえるだろう。また、『経済学対話』においては常に理性的で現実的な論調をくずさなかったマーセットも、『ホプキンズ』では、経済学を寓話として教えるを試み、それはまるで『経済学対話』の序文で紹介していたエッジワースの「サクランボの果樹園」やミダス王の物語を今度は自ら作る側にまわろうと新たに挑戦していたととらえることもできる。それ以外にも、エッジワースの個々の道徳的教訓物語のスタイルは、『ジョン・ホプキンズ』だけでなく『子供のための物語集』などといったマーセットの創作活動晩年期における、児童を対象とした小話集に踏襲されることになる。

興味深いことに、マーセットの作風に転機が訪れた頃より10年ほど前の1820年代なかば以降、マーセット自身が確立した対話教本シリーズとまったく体裁を同じくする数々の類似教本類がマーセット以外の文筆家によって書かれ、流布していくようになった。これらの教本類は、登場人物の名前こそ変えてはいるものの、多くの場合、博学な既婚女性教諭と10代半ばの向学心ある生徒による対話形式のレッスンという枠組も同様に、タイトルにしても扱う科目名を代替するのみであったため、マーセットに関して書かれた唯一の伝記の著者であるポーキングホーンでさえも、類似本の一部に関してマーセットが手掛けたことを疑わなかったというのは、ある意味、皮肉なことであろう。

ポーキングホーン著『たぐい稀なる女性』(*An Uncommon Woman*, 1993)の巻末には、生前マーセットが発表した30数冊におよぶ作品を時系列に配置した表が添付されており、その系統だった作品群の紹介は、マーセット研究者にとって貴重な資料であり続けてきた。また、巻末の表に記されたほぼすべての作品に関しては、本文中において、彼女の生前の伝記的エピソードに関連して、それぞれが、彼女の人生においてどの時点でどのような

²⁸ 小話「三人の巨人たち」に関する論は拙論『ジェイン・マーセットの小説教本『経済学に対するジョン・ホプキンズの見解』(1833) —その物語性とイデオロギー— (2008) において詳細を論じている。

な意図をもって書かれたものであるかについて簡単な説明がなされていることも、この表の信ぴょう性を高めることに少なからず貢献してきた。しかしながら、この表でポーキングホーンの挙げているうちの数冊—少なくとも『植物学対話』（*Conversations on Botany* by Sarah Mary Fitton and Elizabeth Fitton, 1817）、『鉱物学対話』（*Conversations on Mineralogy* by Delvalle Lowry, 1822）、そして『年代学対話』（*Conversations on Chronology* by Edward Jesse, 1837）に関しては、明らかにマーセットではなく別の著者が存在していることが判明している²⁴。これらのうち、たとえばフィットン姉妹による『植物学対話』は、序文においてエッジワースの『学問を志す女性のための書簡集』にある化学への関心を肯定する一文を引用した上で、その内容はそのまま植物学にも応用できるという前提のもとに、この教本のタイトルが実は「あの賞賛されるべき『化学対話』にちなんでいるということから、この本の著者についてふれておくことは必要であろう」と前置きしている²⁵。作者の名前も出版当時には明かさず、エッジワースへの言及に続いて『化学対話』への傾倒を明言している以上、この教本がマーセットの作品であるにとらえても致し方ない側面もあったといえるのかもしれない。加えて、その本文では、日常会話としてさりげなく、しかしかなりの詳細にわたってリンネの植物学を母が息子に講義する形式をとっており、イラストにも多くの草花の写実絵画が挿入されて完成度の高い教本として仕上がっている。これに続き、『鉱物学対話』でも再びその作者、デルヴァル・ロウリーが序文において、『化学対話』の対話形式が教育的に有効であるがゆえに何度も版を重ね、同じ著者が『経済学対話』や『自然科学対話』も続けて出版していること、さらに前述の『植物学対話』や『幾何学対話』²⁶もこの例にならっているという当時の状況を説明しながら、自身の教本の模倣行為を正当化している²⁷。また、ポーキングホーン著の伝記に掲載はされなかったものの、フィットン姉妹の『植物学対話』と同年に出版された『地質学対話』（*Conversations on Geology* by Granville Penn, 1828）でも同様に、地質学を学びたい者には「人気の高い『対話』形式でその学問を紹介すること」を「別段ことわる必要もないと思ってもらえることであろう」としている²⁸。『地質学対話』はエドワードとクリスティナという姉弟に

²⁴ ここで挙げているもの以外でも、たとえば作者不詳の『自然と芸術の会話』（*Conversations on Nature and Art*, 1837）は、題材としてはマーセットが扱う可能性のある自然科学をテーマとしている部分もあるが、指南役の教諭F夫人は生徒のヘンリエッタ、フレデリックの叔母であり、エスターとメアリーの母親でもあるという設定であり、これまでのマーセットの作風とは一線を画す内容となっている。マーセットの対話教本シリーズで見られたような序章での説明書きも存在しないため、この作品がマーセット著である可能性は低いと考えてよいだろう。

²⁵ Fitton, vi-vii.

²⁶ *Conversations on Algebra* はウィリアム・コウルによって1818年に発表されている。

²⁷ Lowry, iii-iv.

²⁸ Penn, v.

母親であるR夫人が教授する形式をとっているが、レッスンを始めることになった経緯として、マーセットの教本を引き合いにしている親子の対話が描かれる。

エドワード

こういった興味深い題材「地質学について」をととても知りたくは思うけれど、理解できるのかどうか、自信がないなあ。あの楽しい『化学対話』のような簡単な地質学の本はないのかな、あれならぼくでも難なく読むことができたのだけど。

R夫人

私の知る限り、そのような本は地質学についてはないですね。地質学というのはまだ新しい科学の学問ですし、特に人気のある作家もまだ出てはいないのです。でも、あなたがそれほど勉強したいというのだったら、本なしでやってみたらどうでしょう？ 私は地質学の原理と議論に関する知識を学ぶ機会に恵まれていましたし、喜んであなたに教えてあげますよ²⁹。

経済学の講義がまだ新しかった頃に、その講義を女性であるがゆえに聴講できないというキャロラインに対し、「この分野の勉強がさかんに議論されるような環境に長らく身をおいてきた」というB夫人がその知識を授けるために対話形式で開始する『経済学対話』冒頭部分と、対して変わらないお膳立てが、この類似教本にもみられるのである³⁰。

マーセットの対話教本シリーズがこうして後続の教本執筆家たちの類似教本作成に利用されたことを、マーセット自身はどうとらえていたのだろうか。1830年代に入って、この教本作家の「大家」が、対象読者を青少年から児童へとうつし、おなじみのB夫人やキャロラインが登場する「対話教本」シリーズから身を引いてしまったことと、類似本の普及に因果関係がまったくないとは言えないかもしれない。しかしながら、類似教本の存在はそれ自体、意義がなかったとは必ずしも言えないだろう。というのも、類似本が出まわることすなわち、マーセットのうち立てた教本シリーズの形式およびスタイルが一般読者にとって歓迎される内容であり、つまり、教育的効果があることの何よりの証であったといえるからである。加えて、功利的な側面からも、マーセット自身の出版物自体が類似本の流布によってその売れ行きさらなる上昇をみたことも事実であった。実際、マーセッ

²⁹ Ibid., 4.

³⁰ Marcet, 15.

トの教本を出版していたロングマンは、1805年に彼女の『化学対話』1,000部を印刷したが、1820年代にはそれは二つの版でそれぞれ2,000部の増刷になったという。マーセットの確立したこの対話教本スタイルの好調な売れ行きを出版社ロングマンが見逃すはずはなく、前述の『植物学対話』や『鉱物学対話』も含めて、いわゆる「対話による科学教本シリーズ」（マーセットの作品群のみならず、“Conversations on” で始まる多くの類似教本を含む）の多くが、その後ロングマンから出版され、そこで版を重ねることになったのであった⁸⁰。

イギリス経済学史の分野においては、19世紀にその学問の大衆化に貢献した最初の教本『経済学対話』の著者として知られるにとどまっていたジェイン・マーセットであるが、実のところ、『経済学対話』を含めた彼女の対話教本全般に共通しているスタイルの確立には、エッジワース父娘、バーボールドとエイキン姉弟を含む、当時の児童・青少年のための科学教本や物語、そして教育論に負うところが大きかった。そしてまた、当然の成り行きとして、今度はマーセットのうみだした教本に影響を受けた後続の執筆者たちは、彼女の作品の特に枠組を模倣したのであった。そして、彼らの類似本の普及がすなわち19世紀前半の科学教本の興隆につながっていったのである。このような点から考慮して、マーセットは19世紀前半に英国で活躍した異なる学問分野における教本作家であるだけでなく、当時の児童・青少年教本のあるべきひな形を提示し、教育史の潮流の中で大きく貢献した人物といえるかもしれない。

参 考 文 献

- [1] Aikin, John and Anna Laetitia Barbauld. *Evenings at Home*. 1809. Ed. Aileen Fyfe. In *Science for Children*. Vol. 1. Bristol, Thoemmes Press, 2003.
- [2] Armstrong, Eva V. “Jane Marcet and Her *Conversations on Chemistry*.” *Journal of Chemical Education* 15 (1938): 53-57.
- [3] Barbauld, Anna Laetitia. *Memoir of Mrs. Barbauld, Including Letters and Notices of Her Family and Friends*. London: George Bell and Sons, 1874.
- [4] Briggs, Julia, Dennis Butts, and M. O. Grenby. *Popular Children's Literature in Britain*. Hampshire: Ashgate Publishing Ltd., 2008.
- [5] Edgeworth, Maria. “The Cherry Orchard.” 1801. Eds. Elizabeth Eger, Clíona ÓGallchoir and Marilyn Butler. In *The Pickering Masters of The Novels and*

⁸⁰ Briggs, 222-224. 対話教本には“Conversations on”で始まるタイトルのもの以外にも、ジョイス牧師の『科学対話』（*Scientific Dialogues*）から表題を模倣した「ダイアローグ教本」シリーズや、化学者サミュエル・パークス著『化学問答集』（*Chemistry Catechism*）をまねた「問答集」シリーズなどもあったという。

- Selected Works of Maria Edgeworth*. Vol. 12. London: Pickering and Chatto, 2003.
- [6] —. *Letter for Literary Ladies*. 1795. Whitefish: Kessinger, 2004.
- [7] —. *The Life and Letters of Maria Edgeworth*. Vol. 1. Ed. Augustus J. C. Hare. Middlesex: the Echo Library, 2007.
- [8] Edgeworth, Maria and Richard Lovell Edgeworth. *Practical Education*. 1798. Ed. Susan Manly. In *The Pickering Masters of The Novels and Selected Works of Maria Edgeworth*. Vol. 11. London: Pickering and Chatto, 2003.
- [9] Fitton, Sarah Mary, and Elizabeth Fitton. *Conversations on Botany*. Sixth Ed. London: Longman, 1828.
- [10] Fyfe, Aileen. Introduction. *Evenings at Home*. By Aikin and Barbauld.
- [11] Henderson, Willie. *Economics as Literature*. London: Routledge, 1995.
- [12] Joyce, Jeremiah. *Scientific Dialogues: Intended for the Instruction and Entertainment of Young People in Which the First Principles of Natural and Experimental Philosophy are Fully Explained*. London, 1805.
- [13] Lowry, Delvalle. *Conversations on Mineralogy*. London, 1822.
- [14] Marcet, Jane Haldimand. *Conversations on Political Economy in Which the Elements of That Science are Familiarly Explained*. London, 1816.
- [15] Martineau, Harriet. *Harriet Martineau's Autobiography*. Ed. Maria Weston Chapman. Boston: J. R. Osgood and Company, 1877.
- [16] Penn, Granville. *Conversations on Geology*. London, 1828.
- [17] Polkinghorn, Bette. *Jane Marcet: An Uncommon Woman*. Aldermaston: Forestwood Publications, 1993.
- [18] —. “Jane Marcet and Harriet Martineau: motive, market experience and reception of their works popularizing classical political economy.” *Women of Value: Feminist Essays on the History of Women in Economics*. Eds. Mary Ann Dimand, Robert W. Dimand, and Evelyn L. Forget. Aldershot: Edward Elgar Publishing Ltd., 1995. 71–81.
- [19] Rossotti, Hazel. *Chemistry in the Schoolroom: 1806*. Bloomington: Authorhouse, 2006.
- [20] Yoshino, Narumi. “Jane Marcet’s *John Hopkins’s Notions of Political Economy* (1833): Its Narrativity and Ideology.” *Ikoma Journal of Economics*, Vol. 5, No. 3, pp. 137–156, 2008. (In Japanese)